

老舎の心の原風景

－北京の中国近現代文学地図(1)－

李 慶国

わたしは北平(北京の旧称)をこよなく愛する。この愛はほとんど言葉では言い表せない。わたしは母親を愛する。けれども、どういうふうに愛しているか説明することはできない。…わたしの北平への愛は母親への愛によく似ている。

老舎「北平を想う」(『宇宙風』19期、1936年)より

北京は悠久な歴史と燦爛たる文明を持つ古都である。

80年代以降の改革開放はこの古都にも急激な変化をもたらしている。モダンな現代建築、立体交差、高層ビルなどがどんどん現れ、古い建物が次々に取り壊され、北京特有の、古い昔ながらの胡同(路地)の一部も既に北京地図上から姿を消してしまった。旅行社のガイドさんの話によれば、北京の地図は月ごとに作り直さなければならないほどだそうだ。確かに北京で買ったばかりの『'99最新版北京旅遊交通図』(地質出版社、1999年5月出版)にも、わたしたちが泊まった、「北京銀座」と言われる最大の繁華街王府井大街の中心地に位置する王府井大飯店(1999年2月オープン)さえ載っていなかった。

7月下旬の北京は猛暑であった。連日来、灼熱の太陽の下、空気もまるで燃えているようだ。わたしたちが北京に着いた翌日(23日)は一番暑くて気温は42度を超えていた。天気予報によると、北京の最高気温が42度を超えたのは30年ぶりのことだそうだ。学生たちは暑さにも負けず、それぞれの班ごとの研究テーマに応じて片手で地図を持ちながら、町へ出発した。彼らの姿を見てわたしも元気が湧いてきた。午後に暇を見つけ、わたしは北京の中国近現代文学地図の研究調査のために念願の老舎記念館へ足を運んだ。

老舎の文学世界－北京庶民社会の百科全書

老舎は、本名は舒慶春^{じよ}、1899年2月3日(旧暦の1898年12月23日)に北京の貧しい満州旗人の家に生まれる。老舎というのは、彼の最もよく使用したペンネームで、1926年にデビュー作長編小説『張さんの哲学』を『小説月報』に連載したときから使い始めた。他には舎予^{あさな}という字もよく使ったのである。「舎予」は姓の「舒」を分解したもので、「舎」はshěと読み、「捨てる」の意味、「予」は「わたし、自分」の意味で、つまり「自分を捨てる」ということになる。老舎の息子舒乙は、舎予という字は老舎が「憂国憂民、社会改造に自らを捨てよう」という気持ちを字に表したのである」(『文豪老舎の生涯』舒乙著、林芳編訳、中公新書、1995年)と述べている。

老舎は中国近代文学の代表的作家の中では特異な存在である。まず、出身地から言えば、魯迅が浙江紹興、郭沫若が四川樂山、茅盾が浙江桐郷、巴金が四川成都、謝冰心が福建閩侯、沈從文が湖南鳳凰と、みな南方出身であるのに対し、老舎だけは北方のしかも首都である北京に生まれ育った。そこで、老舎には北京を舞台にした作品が非常に多い。また、彼は純粋な北京語を駆使して、それによって独自の文学世界を作り出した。老舎夫人胡絮

青はかつて「老舎は一生北京を描いた。老舎と北京を切り離すことはできない。北京がなければ老舎も存在しない」と述べたことがある。「老舎ほど北京を愛したひとは、まずいないといわれる」（『北京』竹内実著、文春文庫、1999年）ということばに示されるように学者の定評もある。さらに、老舎は社会の底辺にいる貧しい庶民の世界で幼少年時代を送った。老舎が2歳の時、紫禁城の近衛兵だった父は八カ国連合軍北京侵攻で戦死し、赤貧の中、母の手ひとつで育てられた。自ら貧困をなめ尽くした老舎は、下層社会の人々に深い同情を寄せた。彼の作品に登場する貧しい庶民の人物の中には老舎自身の体験、あるいは分身が融けこんでいる。また、老舎は他の作家より演劇や伝統的な民間芸能に精通し、自分でも20余編の戯曲の脚本のほか多くの民間芸能の台本（評書、快板書、鼓詞、数来宝、漫才など）を書いた。特に、老舎の創作した新劇『茶館』は、老舎の代表作であるだけでなく、中国あるいは世界の名戯曲でもある。後でわかったことであるが、わたしたちが泊まったホテルの真向かいにある首都劇場では、そのとき10月1日建国記念日の10余年ぶりの『茶館』の再演に向けて練習をしているところだった。

老舎が小説を創作をはじめたきっかけは、イギリスのロンドン大学東方学院で中国語教師をしたとき、ホームシックにかかったことだった。長編小説『張さんの哲学』（1926）、『趙子曰』（1927）、『馬さん父子』（1929）は、皆イギリス滞在中に書かれたものである。その後、シンガポール滞在中には長編『小坡の誕生日』（1931）を書いた。帰国後、老舎は長編『猫城記』『離婚』（1933）、『牛天賜伝』（1934）および短編集『趕集』（1934）、『桜海集』（1935）『蛤藻集』を発表した。1936年夏には老舎は小説の創作に専念するため、山東大学の教職を辞任した。同年、長編代表作『駱駝祥子』を完成し、「そのユーモアとペーソスを交えて北京の庶民を活写した独特の物語的作風は広範な読者を獲得した」（「老舎の世界」伊藤敬一著、『東京大学教養部外国語科研究紀要巻』2号、1972年）。アメリカでベストセラーになった。日本でも『駱駝祥子』の翻訳は非常に多く、少なくとも5種類の訳と13種類以上の版本がある。

1937年、抗日戦争が勃発すると、老舎は抗戦救国の運動に身を投じ、中華全国文芸界団結抗敵協会の理事と総務部主任とを兼任した。その間、抗日闘争のために老舎はいろいろな大衆文芸や短編及び戯曲『残霧』（1939）、『国家至上』（1940）、『張自忠』（1941）などを書きつづけた。抗戦後半期には大河小説『四世同堂』の第1部『惶惑』、第2部『偷生』を書き、第3部『飢荒』は1949年に完成した。この小説は「小羊圈」胡同に住む祁老人の四世代家族と近所に住む様々な人々の生活の描写を通じて、日本軍に占領された北京と、北京の庶民の怒りと悲しみを深く描いたものである。『四世同堂』について、日本の学者豊島与志雄は「全日本人必読の書である」と述べ、戦争反省の教科書であると高く評価している（『四世同堂・下』日下恒夫譯 月曜書房、1951年版より）。

1949年にアメリカ国務省の招きでニューヨークに滞在した老舎は、周恩来総理の呼びかけに応じて帰国した。解放後、老舎は社会主義文化建設の事業に積極的に参加し、北京市文学芸術界联合会などの多くの指導的職務を担いつつ、同時に精力的に創作活動を行った。1966年なくなるまで『方珍珠』（1950）『龍鬚溝』（1950）『春華秋実』（1953）『西望長安』（1956）『茶館』（1957）『全家福』（1959）『神拳』（1961）『正紅旗下』（小説）（1961～1962）などの23部の戯曲の脚本と多くの芸能の台本、散文、詩、雑文などを発表した。中国近代文学の代表的作家たちは解放後いろいろな原因であまり作品を書かなくなった中で、老舎

が多作であったことは非常に興味深い。

老舎と北京のかかわりはあまりにも深い。老舎が北京以外の土地で書いた作品にも北京を舞台したものがかなり多い。老舎研究家の中山時子はこのように述べている。「老舎が北京を舞台に小説を書くとき、彼は故郷北京の映像を心のスクリーンに上映しながら、そのイメージをふくらませ、そこに人物を活躍させていたのである。故郷北京こそは、まさに彼のイメージの源泉だったのである」（『老舎事典・序』大修館書店、1988年）。老舎の作品は読者に当時の北京の社会・風俗・習慣・人々の生活・言語などの、生き生きとして鮮明な百科全書を長い絵巻の形にして与えたと言っても過言ではない。

老舎記念館

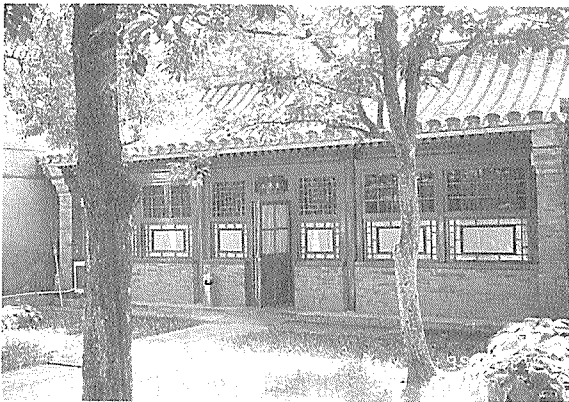
王府井飯店から王府井大街を南に行き、一番目の交差点から右へ曲がる燈市口西街があり、そこからさらに西へ行くと、左側に新華社北京分社がある。その向かいの小さな豊富胡同を少し入ったところにあるのが老舎の旧居である。繁華な王府井大街からあまりはなれていないが、とても静かな印象であった。入口にかけられた赤地に金字の縦長の表札に「老舎記念館」と書いてある。左側の壁に金メッキした横長の表札もあり、そこには「老舎故居」（老舎の旧居）と記されている。

老舎は1950年から16年間ここに住んでいた。1997年、北京市文物局は老舎旧居を修理して老舎記念館を創立、1999年2月3日の老舎の生誕百周年記念日に合わせて一般公開が開始された。



老舎記念館の入口

入口を入ると影壁があり、中庭があり小さな典型的な四合院である。中庭に一つの大きな水がめが置いてあり、老舎が1950年3月にここに引っ越しきたとき植えた2本の柿の木もある。毎年の秋になると紅い柿がとれると記念館の管理人が教えてくれた。老舎夫人胡絮青は「丹柿小院」（丹柿の庭）という名を付けていた。老舎は草花を愛した。庭をたく



老舎の旧居“丹柿小院”

さんの鉢植で埋めていた。老舎は創作に疲れたとき、よく草花の世話をしたそう。いまは鉢植ではなく長方形の花壇が4つがあり、花の苗が植えてある。花の名前はわからないが、小さい苗が青々と光って見える。老舎の解放後の作品は殆どここで書かれたという。

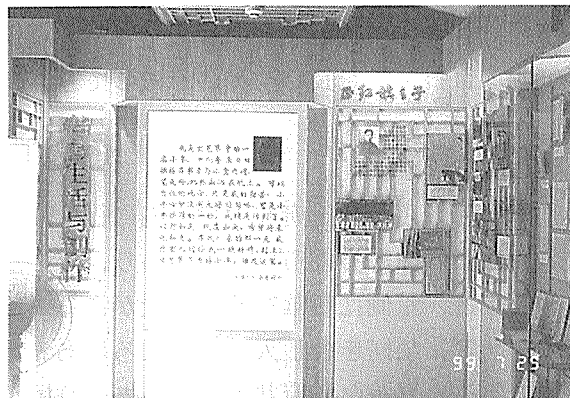
老舎の旧居のうち2間が展示室になっていて、「正紅旗の子」、「東方学院」、「山東の歲月」、「八方風雨」、「アメリカの旅」、「丹柿の庭」などの6つのコーナーが設けられた。老舎の書斎兼寝室には、

老舎生前に使われた机や椅子、ベッド、コート掛け、背広と革靴などがそのまま置いてある。コート掛けには老舎が生前着用していたコートがかかっている。1959年に周恩来総理が訪問した際掛けたソファも客間にある。老舎の机は表面に大理石が貼ってある。その上に斉白石が老舎のために彫った印鑑、馮玉祥が贈った玉石の朱肉ケースと「笠翁李漁書画硯」という字を彫りつけた清朝の有名な戯曲家李漁が使っていたという硯が置いてある。2つの展示室には7500冊の図書収められ、また350点の実物が展示されている。

老舎は極めて勤勉な作家で、一生の間に約800万字の作品を書いた。彼の作品は今でも広範な読者に愛好され、中国近現代文学の貴重な文化的財産となっている。特に、拝金主義横行の現在の中国では、老舎の作品から多くのことが学べるに違いないとわたしは思っている。

ふと気づいたら、約50分の間に老舎記念館を見学に来る人はわたし一人しかいなかった。こんな立派な記念館で、しかも夏休みなのに…ちょっと驚いた。

老舎記念館を出てから、わたしは王府井大飯店の方向に向けて胡同から胡同へ通り抜けて歩いていた。突然、静かな胡同の奥から紅衛兵たちのスローガンを唱える声が耳に響きわたる。その騒々しい声が海潮のように迫ってくる。立ち止まったわたしはもう一度耳を澄ましたが、静かな胡同には愈くて熱い陽光が背中を照射している以外何にもなかった。確かに何の音もない。しかし33年前の今日、文革の嵐のなかでのこの辺りは決して今のよう静かな所ではなかったのであろう。



老舎記念館の展示室

老舎の死

1966年8月23日は受難の日であった。

文化大革命が5月に始まってから、もう3ヶ月になる。紅衛兵を中心に行われた、「四旧」（古い思想、古い文化、古い風俗、古い習慣）を取り除こうとする運動は最高潮に達しようとしていた。当時老舎は北京市文学芸術聯合会主席であった。舒乙は「老舎最後の二日」で「その時、父は退院したばかりであった。夏に入ってから精神的なストレスが嵩じ、ある夜突然、大量の血を吐き、北京病院に運び込まれ、そのまま入院となった。退院の際、家での安静をいわたされたのに、父はすぐさま仕事に復帰した。運命は非情にも、この献身的精神の持ち主を嘲弄し、あっという間に最悪の事態へ向かわせた。父は猛スピードで人生の終着駅へと突走っていった」（『文豪老舎の生涯』より）と記している。老舎退院後の出勤第一日目が、実にその受難の日であった。

老舎は他の20数名の著名な作家、芸術家と一緒に熱狂した紅衛兵たちによってトラックで成賢街（国子監街）の孔子廟に運ばれて、京劇の小道具や芝居衣裳を燃え上がる炎の周辺に跪かせ、ひどい汚辱と暴行を加えられたのである。「老舎は最も重傷で、頭を割られて血が流れ、白いワイシャツ一面に鮮血がほとばしった」（同上）。そのとき、老舎の身

に着せられた罪名は「現行反革命分子」、「資産階級の権威」、「老反共主義者」、「封建貴族の子孫」等があった。翌日の朝、老舎はいつもどおりの時間に家を出て、そのまま行方知れずとなった。

25日の早朝、老舎の屍体が北京徳勝門外の太平湖の後湖で発見された。

それから14年、文化大革命が終結して4年後の1980年12月20日『北京日報』に、北京市公安局の統計によると、1966年8、9月だけで北京でリンチを受けて死んだ人は1,772人、家財が没収されたのは33,695軒だったという記事が載っている（『文化大革命：史実與研究』劉青峰編、香港中文大学出版社、1996年）。老舎はその死者のなかの一人であった。

言うまでもなく、文化大革命は偶発な事件ではなく、建国以来反右派闘争や大躍進などの政治運動の延長である。文学界でいうと、54年の「胡適の『紅樓夢』研究」の批判、55年の「丁（玲）・陳（企霞）反党小集団」批判、「胡風反革命集団」批判、57年の、「反右派闘争」などの様々の政治批判がなければ、文革初期の新編歴史劇『海瑞の免官』批判や「三家村」批判なども起こらなかつたはずである。しかし、老舎は建国後の各種の政治運動に積極的に参加し、また批判の文章をもよく発表した（『老舎全集・14』参照。人民文学出版社、1999年）。勿論、老舎のような作家、学者、知識人は非常に多く、彼らは共産党政府の政策、号令、指示などを誠実に信じ、それに呼応して政治運動に参加した。これこそは歴史の悲劇であり、かつ中国近現代知識人の悲劇であった。

その日、老舎は市文聯には行かなかった。老舎の家から太平湖までは歩いて1時間以上かかるだろう。老舎はどのようにして太平湖へ行ったのか、どの道筋を通ったか、今もわからない。しかし、おそらく老舎が家を出たとき、そしてこの胡同を歩いたとき、既に生死の選択が頭の中から離れることはなかつただろう。

大学時代、ある霧雨がしとしとと降り続ける午後、図書館の閲覧室で老舎の『四世同堂』の以下の段落を読んだとき、心臓が止まったような感じをわたしはいまも鮮明に覚えている。

（日本軍のひどい汚辱と毆打を受けた祁老人の長男天祐は、平則門（阜城門の俗称）外の護城河へ行って身を投じた。）

一歩歩いては止まり、又一歩歩くという具合にして、西へ向かって歩いていった。彼の心の中はまるっきりからっぽだった。年老いた父、長わずらいの妻、三人の息子、息子の嫁、孫たち、そして自分の店、どれもみなもう存在していないかのようにだった。ただお濠と、そしてその愛すべき水が見えた。水は彼に手招きをしているような気がした。彼はうなずいた。彼の世界はもう滅びてしまい、別の世界でこそ、彼の恥辱は洗い流される。…太陽は落ちてしまい、岸辺の樹木は静かに彼を待っていた。空には、かすかに紅い夕焼雲がかかり、彼に向かってほほえみかけているようだった。流れはとても速く、もう彼を待ちきれないかのようにだった。水は微かな声をだし、なんだか低い声で彼を呼んでいるような気がした。

（『四世同堂・中』竹中伸・蘆田孝昭譯、学習研究社、1983年、442頁）

老舎の作品に書かれた生家

老舎記念館を後にしてから老舎の生家へ行きたいと思ったが、時間がなくとても残念だった。

老舎の夫人胡絮青と息子舒乙による1979年の調査によって、老舎の生家は西城区護国寺街小楊家胡同（旧称小羊圈胡同）にあったことが一般に知られるようになった（『記老舎 誕生地』胡潔青・舒乙著、『新文学史料』第1期、1980年）。『老舎全集』をひもとくと、老舎はじつにしばしば自分の作品の中に生家について触れている。老舎の自伝風小説『小人物自述』（未完）、『正紅旗下』（未完）、エッセー『勤勉節約』、『私の母親』はもちろん、『四世同堂』の祁老人一家が住んでいる「小羊圈胡同」もそれはそのまま老舎の幼少のころ住んでいた世界と言ってもよい。

例えば、『小人物自述』では以下のように描かれている。

私はこのボロ家の中に生まれ、育った。ここには南向きの部屋があるが、格好はあまりよくない。院子（中庭）は東西が長く、南北が短い細長い形をしている。地勢が低いので、雨が降り続けば、院子に水がいっぱいたまって、河のようになった。北の棟3間で入口が2つ、その2間に私達が住み、残りの1間に伯母が住んでいた。東の棟2つは、関お婆さんとペンキ塗りの修業中だった息子に貸していた。……東の棟の裏に小さな便所があった。この院子は南北が狭く、2間の南の棟は院子の西に寄っている。

（『老舎全集・8』人民文学出版社、1999年）

『四世同堂』の中で祁老人一家の住居として出てくる「小羊圈5号」は老舎の生家、現在の護国寺街小楊家胡同8号の住宅の構えと非常に似ている。

祁さんの家は西城の護国寺近く‘小羊圈’にある。……西大街に通じるのはヒョウタンの口と首のところで、ごく細く長く、きたない。ヒョウタンの口はたしかに小さく、注意してさがすか郵便配達にきくかしなければ、ほんとうに見落としやすかった。ヒョウタンの首に入ると扉ぎわに寄せてあるゴミが見え、そこで、コロンブスが海面の浮遊物を見てやっと前進したように、君は前進する気になる。数十歩あるくとからりと開け、君はヒョウタンの胸を見る。それは、東西四十歩、南北三十歩の長楕円形で、中に二本のえんじゅの大木があり、まわりを六、七軒がかこんでいる。さらに進むと、また、小さな横丁ーヒョウタンの腰だ。‘腰’を抜けると、また空地で、‘胸’の二、三倍はあり、それがヒョウタンの‘腹’になる。‘胸’と‘腹’が羊の柵だったのである。

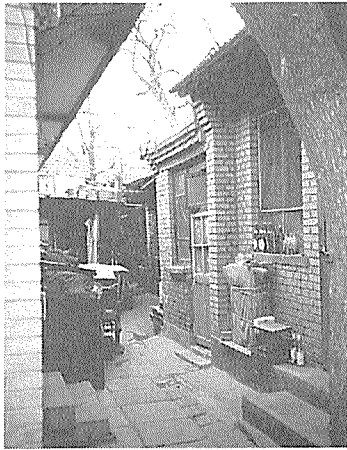
（『四世同堂・上』蘆田孝昭譯、学習研究社、1982年）

『駱駝祥子』の中にも老舎の生家周辺に住んでいた人々の住居と生活の様子とおぼしき描写がある。

この貧乏長屋には、七、八世帯が住んでいる。たいていの家がわずか一間で、なかにはその一間に、一家七、八人が詰め込まれているところもある。住んでいるのは車夫、物売り、巡査、ボーイといった連中で、みんなそれぞれに仕事を持ち、遊んでいる者は一人もいない。子供たちさえ手籠を下げて、朝は施粥をもらいに行き、昼から石炭がらを拾いにいく。

（『老舎・巴金 現代中国文学4』市川宏・杉本達夫譯、河出書房新社、1970年）

この小楊家胡同は、著名な言語学者張清常の考証によると、確かに旧称を「小羊圈胡同」といい、30年代に改称されたという（『北京街巷名称史話』張清常著、北京語言文化大学出版社、1997年）。老舎はここで幼年時代を過ごした。現在、小楊家胡同は北京の最も狭くて小さな胡同の一つである。舒乙は「“小羊圈”は、老舎に、北京というこの古い城の下層階級と複雑な関係をもたせ、その心と言葉を理解させた。小さな胡同とその住人は、



老舎の生家 小楊家胡同8号

彼の描く作品の格好の題材になった。人々は『駱駝祥子』『四世同堂』『龍鬚溝』『茶館』『正紅旗下』の作品から、いとも容易にこれらの人物の影を探しあてることができる。これらの影の本当の典拠は、老舎の子供時代の故郷「あの彼を育ててくれた、それはそれは小さな胡同であった」（『北京の父老舎』舒乙著、中島晋譯、作品社、1988年）と述べている。老舎は自らも「私自身は貧乏人の出身である。そのため貧乏人に対する深い同情を持っている。私の職業は私を常に知識人の中に位置づけるが、私の友人は必ずしも教授と学者ではない。拳術をする人、芸人、人力車の車夫、そういった人々も私の友達である」（『老舎選集・自序』『老舎研究資料・上』北京十月文芸出版社、1988年）と述べたことがある。

確かに北京の貧しい庶民の下町で生まれた作家老舎にとって、その町に住む人々の暮らし、境遇と運命は生涯心引かれるものであった。それらはまた老舎の心の原風景でもあり、彼の文学世界の原点をなすものであったとわたしが北京を歩きながらしみじみと感じた。

北京の老舎の足跡

老舎記念館（老舎旧居） 北京東城燈市口西街豐富胡同19号

老舎の生家 北京西城護国寺街小楊家胡同（原名小羊圈胡同）8号

老舎が校長となった（19歳）旧京師公立第17高等小学兼国民学校旧跡 北京方家胡同小学

老舎が紅衛兵たちに吊り上げられ、集団リンチを受けた所 北京成賢街（原名国子監）の孔子廟

老舎が自殺した「太平湖」跡 北京徳勝門外地下鉄の車両庫

老舎茶館（老舎の新劇『茶館』をモデルした演芸場） 北京前門西大街丙2号

（アジア文化学科・助教授）